

2016年
我田引用「ヤサグレたちの街頭」考



生・労働・運動ネット 富山

2016年 我田引用「ヤサグレたちの街頭」考

生・労働・運動ネット 富山

〈i〉「街頭への散種とそこでの

滞留」・・・

(※1)

● 「数寄屋橋交番から銀座四丁目方面を眺めると、晴れた冬の夜空で鈍く光る灰色と濃紺の阻止線がみえる。大正期の青年たち宛ら、向都熱に衝かれて都会に出てきて間もない僕は、不要なほど巨大と思えた晴海通りの真ん中で吹き上がる開放感とともに、鈍色として「実」在する阻止線を見遣っている。そんな僕のまわりでは、公園に押し戻されることを覚悟で急いでその混成性を隊列に整えようと騒めく(もう一人の僕たち)という急拵えの集合性が、さまざまに輝いている。僕は、高校でのささやかな抵抗とそれを理論的(?)に正当化するために独学したマルクスの世界観をこの風景の許で身体的に試行している自分を感じ、この試行を継続することには何らの不合理もないはずだ、と得心する。

コード化と対抗コード化との衝突としてしか現出できない、コード化と脱コード化としての遺漏とのこの共犯的対抗が、共犯的であるほかないからこそ、超コード化装置との直接的で暴力的な敵対として露出することが象(かたど)るこの風景は、数ブロックを挟んで阻止線と対峙する刹那(もう一人の僕たち)が創り

出した消滅必至の緊張線がその中心にある風景にほかならなかつたけれども、それはまた、その数日前、都内某所で組織者の意図を大きく超えて実現した実際は散逸する流動とも異なつてもいたけれども、敵対の緊張で腫れ上がったこの街頭に有象無象がまさに街頭の本質的構成員として蛸集し、この敵対をより掛らせる、そうした風景だった。」(※2)

● 「

「アジテーター」は言葉である。

「言葉が絶たれてある」という反言語の経験から

おくりだされてくる……

大衆とは異物の言葉である。

数多くの同様の〈言葉〉の群から任意に抜き出されたこれらの〈言葉〉は、68年9月20に脱稿、同年の「情況」11月号掲載翌年刊行の『叛乱論』に収録された「叛乱論」にある。著者は〈遠方から〉の長崎浩である。……

それは当時高校生だった僕に「叛乱論」が与えた衝撃にある。また、この〈言葉〉を語る人びとが周囲に実在しなかったがゆえに直達したとも言うべき、「叛乱論」という出来事の純粋性

がこの衝撃を倍加した。衝撃の強度は〈言葉〉へ課／価された固有な負荷（価）にあった。それは明確に意識されてもいた。当時すでに僕は、この〈言葉〉に〈せいじ〉、また同じ事だが、〈がいとう〉とルビを振って読んでいた……。

こうして僕たちは、そして論理（党派言語）を背後から事後的に密輸入した一部の活動家を除けば当時の大学生もまた、端っから歴史の必然などといった論理とは無縁だった。これははつきりさせておかなければならない。僕たちはウザイ現状からの跳躍を欲望したにすぎない。それは抵抗という日常だった。だが論理は、いつも〈言葉〉に遅れて遣、つてくる——それは避けられない。部屋アバトのドアがノックされる。それはいつも暗く深い夜だ。論理は夜見る夢となる。」

「僕の〈68年〉は三界のあらゆる意味における場Ⅱ起源の放棄において決定的だった。それは、帰属の場の予めの非在あるいはその可能性を受諾する、街頭への散種とそこでの滞留を意味していた。……。

むしろここでは、次のようにいふべきだろう。すなわち、放棄と喪失との巨大な懸隔、それが僕たち〈嵌め殺し〉の時代が〈68年〉において引き裂かれる分岐となった、と。それ以前に〈喪失〉と固有なその奪回の試みが在ったことは慥かだ。それ以後に〈逃走〉が語られたこともまた、慥かだ。そしてふたたび慥かなこと、それはその狭間へ僕たち〈嵌め殺し〉の時代が墜落し、20年を隔てて坂口弘『歌稿』（93年）に書き留められた決して巧いとは言えない一つの〈歌〉の「弟」が、僕たち〈嵌め殺し〉の時代の抜き差しならない引き裂かれとして、だが「兄の死」を借りる他なく、次のように叫ぶ他なかったことなのだ。兄の死に弟は叫ぶ。「総括などしたって誰も助からなかった

じゃないか」（後略）（※3）

● 「それぞれの文章を紡ぐ一本の糸は、あの風景を忘れられない、あるいは、忘れないという思いにほかならない。本書の名称が「ヤサグレたちの街頭」となったのは、この私的原点の〈残—抗 resistance resistance ではなく〉、あれ以来杳として行方が知れないあの街頭に、じつは新たな「僕たち」が姿を変えて蛸集し続けているのではないかという思いに駆られて、あるいは新たな「僕たち」を求めて、書き積みまれてきたからである。（後略）（※4）

〈ii〉「われら瑕疵ある者たち」

● 「問題とされるべきはしたがってむしろ、資本—主義が、「無理」であることと「無理が通っている」こととの弁証法的な止揚の宙吊り—非決定を存在的に担う僕のいわゆる「存在的暇庇」そのもの——だが、資本にとつては、そのつど繰り返し強いられるその、「跳躍*39」——によつてのみ担保されているという事態を労働力商品それ自身が存在的に担う「政治」として、理の非在（無理）を一身に〈われわれ〉という集団性において）担う空無——後に触れるように、もちろんそれを沖公祐に遵つて「過剰性」と表現してもよい——のまさに存在的集合性という可能性として、実践することである。

*39

言うまでもないが、マルクスは、蛹（貨幣）の「蝶〔資本〕への成長は、流通部面で行われねばならないし、また流通部面で行われてはならない。これが問題の条件である」と書き（この二文は、〈pund〉で繋がれる対

立であることに注意されたい)、であればこそ資本(家)に跳躍S&Pを強いたうえで、その場口ドス島を「労働力の売買」——だが、その歴史的局面である本源的蓄積過程ではなく、その事後における非ベンスラムの間である「無用の者、立ち入るべからず」の「隠れた生産の場所」——に求めている(KI:181,189)。現代では、いわゆる社会全体が「無用の者、立ち入るべからず」の「隠れた生産の場所」とされねばならない。ところで、この「無用の者」とは誰か?」(※5)

● 「『資本論』とかでマルクスが言っている「階級」は基本的にどういう人たちのことを言っているかというのはいくつ大きな問題で、要するに「階級」は、基本的にはマルクスの体系では、雇われている人をどういふふう規定するかという問題だったと思う。……

この10年というか最近特に問題になっているのは、じゃ失業者は階級的にどよよ、ということが、ぼくとしてはけっこう大事じゃないかと思いはじめています。

(中略)

理論的には、資本家に雇われて給料をもらって、そうした労働力と給料との交換過程で搾取されているんじゃないかという、そうした搾取理解で「労働者」という規定がまずあったわけで、それは雇われているということから搾取が起きているということになるわけ。マルクスは、雇われている過程で搾取がどう起きるかという議論はしているんだけど、問題は、その背後に「収奪」ということが別個にあるってことが問題じゃないか、と。」

「だから資本の目から見ると労働力へexploitする、すな

わち「あなたの労働力を利用して何か良いことをします」、でも全部あげませんというのが基本的に「搾取」のいちばんクリアな表現の仕方なんだけれども、問題は「収奪」ということがその背後にあるんじゃないかというのが、最近よくが考えていることなんだ。」

「利潤を絶え間なく蓄積していくには、「雇っているやつらから搾取するだけじゃなくて、雇われているやつをいつも一生懸命そこできちんとして働かせていくために、その外部に失業者がいて「おまえ、いつでも失業者するぞ」という…」

「脅しというか、そういう機構的な脅威というか悲しさを人びとに植え付けるような装置を自分の運動の外部に制度的に作っていて、資本の蓄積循環の外部にいる失業者は「おれはいつも雇われていたい」というところで働いている労働者にグツと圧力をかける運動が外部にないと、いわゆる「平等」な契約関係による搾取を維持できないというのが、ぼくの基本的な考え方なの。」

「いずれにせよ資本家は職というか働く場を奪っているけど、そいつらもいてくれないと、急に労働者が必要になった時に困るわけ。自分の外に失業者が存在しないと資本の蓄積運動は動いていかない。まるで枕探し状態。でもそれは資本の「自己責任」じゃない。いつも「自己責任」を言われるのは労働者の方。「労働力が要ります」と資本が労働力を買いに労働市場に行ったら、急に「はい」と手を挙げてくれる人がいてもらわないと困る。」

+「これを普通は「相対的過剰人口」と呼んでいるんだけど、何に対して「相対的」かという、資本の蓄積運動にとって取

り敢えず相対的に過剰な人口を外に常備してなければ困りま
す、と言っているわけ、だから絶対的に過剰しているわけじゃ
ない。これをマルクスは、もう一つ他の具体的な言い方で、「産
業予備軍——IRA (Industrial Reserve Army)と軍事用語で呼ん
でいるわけ。予備役ね。外部に放置されながら内部化される形
で、いつも外にいなければならない人なんだけれども資本の責
任で喰わせる義理はない、という人たちなんだ。次に雇うまで、
おまえら何とか生き延びてくれ、といったような。

「産業予備軍」についてもーちよつと話すと、産業予備軍に
マルクスはいくつかの種類を見つけているわけ。流動的とか、
潜在的とか、停滞的とかという種類。景気が良くなったり悪く
なったり景気循環している時に、急に必要になったら「はい」
と手を挙げてくれる人を流動的形態と呼んでいる。潜在的形態
というのは、基本的には農村にいるやつら。もう一つが、ここ
からが今日ちよつとキツク言いたいところなんだけれども、い
わゆる停滞的形態と言われている人たち。要するに、本当はこ
いつらは働いている。資本からいうと失業しているんだけど
も、都会に沈殿していろいろ働いてる。いろいろな形で自分の
ことを維持しなければいけない。村の共同体からも切り離され
たし、連れ合いもない。誰も自分のために代わりに働いてく
れない。だから低賃金労働で働かざるを得なかったりもする。
停滞的形態という、主に都会で沈殿している。それから今日も
う一つキツク言いたい点は「受救貧民Pauperismus」。要する
に誰かに助けてもらわないと喰えない状態までいつている人た
ち。」

「一般的には「本来属すべき階級から追い出された人びと」
という形で、完成したというか、完成を論理的に想定された「正

しい」階級を規準にして後付け的に、いわば資本の目から、定
義されている人びとだよ、普通は乞食や浮浪者だね。」

「そう、グランジというイメージ。これはすごく大事なこ
とだと思うので、評判が悪いマルクスがキツイ言い方で彼(女)
らを紹介しているところがあるんだけど、マルクスの「受
救貧民」の分類は、いま言ったルンペン・プロレタリアートと、
もう一つは景気循環に即して景気が良い時は最低限で雇われる
けれど、悪くなると最初に切られるタイプの労働者。これは労
働能力があるのに受救貧民に落ちてしまっている。もう一つが
孤児や貧乏人の倅、娘。これが産業予備軍の候補として、もっ
ともつと外に置かれている。それで最後にくるのが、マルクス
の言葉をそのまま使っただけでも、墮落した者ね。」

「あともう一つ、零落した者。落っこっちゃって、シヨボ
けちゃったやつ。」

それでもって労働能力がないやつ。マルクスはこういった受
救貧民は資本主義の富の生産とかその発展にとって不可欠な存
在条件なんだ、と言っているわけ。資本はそれを絶対必要とし
ているんだけど、ここからキツクて、でも「この貧民は
資本主義的生産の空費だ」とも言っている。資本主義的生産に
とっては、こいつらを生かしておくのは本当は(！)空費だ、と。
無駄なんだ、と。もつとと言うと、自分にとって「不正出費」だ、
と言うんだ。」

「「空費」にわざわざフランス語で〈faux frais〉という言
葉を入れていて〈faux〉は「偽りの、とか自分のものではない」
という意味で、〈frais〉は「費用とか出費」。」

「問題は、『階級』といった時に、「失業者はどーよ」「『失業者階級』という言葉はどーよ」と言った時に、明らかに階級としては絶対的に存在している。普通に雇われていて搾取されているだけじゃなくて、その外にポーンと置かれながら、その搾取がちゃんと円滑に社会の中で平和に機能するように、資本の外部、だから正規に雇用された者の外部で、めいっばいポロポロにされながら搾取を悲惨に支えているやつがいて、それを資本は「おれの責任じゃないんだよ。おまえらで何とか生き延びてよ」という形で包摂的に排除しながら、でも同時に「そっちで責任もって」と言っている。」(※6)

〈iii〉「ヤサグレたちの街頭」

● 「蓄積体制としてのポストフォーダイズムとは少なくともその労働(力)の包摂形態としては、「街頭」と化した社会(工場)において資本とともに、「彷徨う herenlaufen」労働者(KIII:400)——ヴィルノを藉口すれば、ヤサグレて(Senza Casa)存在論的な無気味—垂乱 *perturbante* と化した労働者(GM:20)——をそのような存在的に存したまま、搾取—収奪することについて成功したシステムであり、それはまた、労働の資本への労働力(商品)としての、実質的な包摂(内部化)が、就業しながらもほとんど失業状態—あるいは産業予備軍を総じて「空費 *faux frais*」と貶む資本にとつて、それがゆえに利用—収奪可能な空席待ち・待命状態(KI:657ff)——に恒常的に置かれた労働者がとる存在様態(外部化)をその完成形態に持つて不可避・不可決な構成要素とする、と。あるいは、誤解を恐れずに単純化すれば、ポストフォーダイズム体制にあっては、すべての労働者は、実質的には「街頭」——逆説的に言え

ば、「資本のコミュニズム」が準備した〈共〉に擲げ出された産業予備軍——で空席待ちの長い列に並ばされながらも、常に就業している、「自由利用可能」な流動資産 *disponible* (KI:661)——として位置づけられている。」*8

*8 行きがけの駄賃風に言えば、この国でさまざまに取り沙汰されている非正規労働論では、一見するに非正規労働者が政策対象となっているかに観えるが、しかし、じつは正規労働者の社会的潰滅とその総体的な非正規化あるいは「街頭労働者」化が目指されているのである。この点は、F.Guattari et T.Negri, *Les nouveaux de liberté*, op. cit., p.50 「保証なき者たち *les non-garantis*」と云う名の許で、いち早く指摘されていた。」(※7)

● 「サッチャリズム レーガノミクス 中曽根臨調以降の、世界的あるいはインター／ナショナルなレヴェルにおける、市場機能と安価な政府の「復権」が、そしてその背後における世界的あるいはインター／ナショナルなレヴェルにおける、街頭の工場化そして工場の街頭化が、問題とされねばならない。

この街頭が、そしてこの工場が、新たな社会的なこと *the social* として、境界それ自体である国民国家を喰い破りながら、うねうねと延長され 拡張され 結び合い、そして「肛門と口とを、同じものの直腸の末端と口頭の末端」として「等置」することによってのみ、私たちが世界を獲得できる潜勢態であるままに行為態であるこの時代に。」(※8)

● 「彼らの世界と歴史の領域に対峙する〈私〉たち」の世界と歴史は、どこで発見されるのか？ しかも後に見る「私」では

なく「私」たちが、悦びの力である独異の私のままに。

ところで「私」たちとは何か？それは彼らの移動線で彼らに對峙する固有の時間性を帯びた状況的「私」たち」という意味で階級である。

「私」と「私」たちとの不気味で無縁な関係の領域が、これまで私たちと等置されてきた社会が国民という国家からズレ始め、この孔から「私」たちが溢出する危機でもある好機であり、したがって国家にとって好機でもある危機なのだ。こうしてグローバルゼイションと「私」たちの緊張とは、国民国家からの「私」たちの能動的溢出と社会を包括的にコード化しえなくなった国民国家による私たちの「私」たちとしての再コード化との敵対の敵対にほかならない。

私たちが、深部から表層へ浮上し、資本流通に匹敵する瞬きで交流することによって「私」たちを構成するという、いまや社会を喪いつつあるがゆえに強権化しつつある国家の境界を多孔化するための、賭金が要求されているだろう。

さきに階級という古色蒼然たる「ことば」の技術を持ち出したが、それはこうした社会と国家との私をめぐるズレを争奪戦の領域とする「私」たち」という階級にほかならない。

国民をめぐる社会と国家のズレを逆手にとって国家から能動的に溢出するために、資本にとってより無気味な「ことば」の技術を駆使する「私」たち」という階級を構想できるか。」

(※9)

●「資本にとっては必ずしも解消される要のない失業者の滞留とその新たな回収経路の構築（第三世界の偏在）そして生産と切れた擬制市場の表層的完結表層的完結の併存が市場の本質（不等価交換）を曝けだし、その結果そこに階級分化が顕わに

なったという現状。

国家との関係における敵対と宥和という多数性の分岐が問題だからであり、それはシステムから降ろされることをシステムから降りることへ転輸するという、資本による包摂とその内部での多数性の存在との転覆的分岐と同義である。

労働へ圧し付けられた多就業形態による搾取―収奪の再編（ネグリはこれを資本による刷新と呼ぶ）に関わる階級論の再検討。

資本が社会全体の実質的包摂を完成するとき、一部のバブルと労働人口の総体的な雑業化をその内部で担う存在としての多数性が、旧来のプロレタリアート概念を批判しながら、登場する。今こそ僕たちは慢性的な不況と新たな貧困（雑業化）をこうした労働をめぐる（包摂―存在）という敵対論として語り始めねばならないだろう。」(※10)

「iv」階級―他称／自称

●「68年」そして「72年」を画期に、僕らは群がることを決定的にそして空間的にも奪われ、接触恐怖症へと制度的に陥れられてきた。僕らの矜持をもって群集 multitudes と自称する権利を決定的に奪われ、他称としての、例えばせいぜい携帯に過ぎないIT革命なるものの群衆 mob であることを甘受する存在に貶められてしまった。

マルクス「資本論」が、冷徹な資本の言葉に化体して、死重 foreGewicht と記し、最新の英訳では意味新潮にもラザロ Lazarus-layers とした人びと、あるいは前者が移動民、後者が端的にノマドと呼ぶ人びとが、マルクスの時代とは異なった形態を担わされて堆積するグローバルな社会が登場したこの10年

の後に、資本によって死重 空費(faux frais(不正出費!))とされたこれらの人びとが、しかしラザロが「ラザロ」あるいはノマドが「ノマド」という単独する概念としてみずからを凝固させることなく星座として甦り、移動し、接触し合うことを悦ぶ、そうした時代が到来するだろうか？

死んだ労働に労働の意味(せめく)を下賜され、悦びを収奪された生きた労働者たち、その結果街頭に、コンビニに、郊外(ポイン、プロバント)に惑う予備役あるいは兵站部の人びと、団塊として差別され街頭に惑う人びと、傷を負って殺し迷う子供たち、携帯の液晶に映される文字以外に本来交歓であるべき交換の手段を喪った人びと、緩慢に捨てられてゆく老いた人びと、強姦を商品交換とされた人びと、文字どおりラザロと指差された人びと……、そうした様々な姿態で社会に散種された産業予備軍。 (※11)

● 「そこで問題は二番目に移るんだけど、そんな階級を誰の言葉でどのように話すのかというのが、けっこう厄介。さっきのは、マルクスが少なくとも『資本論』では〈資本の言葉〉というか〈物の言葉〉で話しているから。マルクスは、いわゆる近代社会の主体を僭称する資本に寄り添ってキツクきつく言っている。それで「おまえらは空費なんだよ」と〈資本の言葉〉で言っている。」

「ぼくらは先業予備軍のことを、もう一度階級を考え直す必要がある。」

でもぼくとしては、一挙にそこへ行く前に、やっぱり取り敢えずは階級を〈資本の言葉〉で一度話してみ、いわば概念的に把握したうえで、そういった「言葉」——マルクスの言葉で言うと「支配的思想は支配者階級の思想だ」と言っているんだ

けれども、そういう言葉を使ってでも、あるいはそれを潜り抜けて、なおかつそうした〈概念が音を上げる〉ような、概念それ自体を毀す運動をする人たちがどこで動いているんだってことを考えたい。いわゆる「階級」というのが〈そこにある〉じゃなくて、どこで構想あるいは仮構できるのかということ、ぼくらは考えていくところまで来ていると思う。「ある」と言うと、実在的にあつて「君たちのことをプロレタリアートと名付けます」と言つて、そいでもつて「一緒に行こうぜ」と言うんじゃない、もつともつと〈資本の言葉〉を使つてもいいから、そういった人たちとぼくらがどういう空間で出会えまた一緒に構想できるか、一緒にいることを思い浮かべることができるといふところが、いま階級論をやる時の、とても大きい任務になつているんじゃないかと思う。ぼくは〈資本の言葉〉によって名指されることを「他称」と言っているけど、他人から名指される階級ね。名指される時に使われる言葉は〈資本の言葉〉でしかない。概念化されてしまった階級。名前をつけられてしまった階級。」

「「ぼくも「私も」と言ってくるやつも取り敢えず明日から、今日からでもいいけど、とにかくプロレタリアだというふうな言葉を使い廻す。そういったところで、過程にある、あるいは運動としての階級みたいなものを、ぼくらはもう一ぺん構想することができるのか？それは〈ぼくらの言葉〉というか、全然意思一致なしの〈言葉の共有〉なんだけれども、ビル・ヘイヴァーが多分ナンシーからいただいた〈無関係の関係〉みたいな、ぼくらが持っている言葉が依然として彼らの言葉でしかないとしても、それを何とか再利用して、ぼくらがマルクスの言うところの対自的階級、意識的な階級という形で、自分たちのことを

表現することができるかどうかという、文体が問題なのね。」

「階級闘争というところから、ぼくらこの闘争というところから階級として群れます、と自称したらどうか。運動みたいなところから「階級」をネーミングしたらどうだろう、というふうに思っているわけ。そういうところから、リストラとかフリーターという問題をきちんと見ていく必要がでてくるだろうと思う。」

「外部にいままで置いておいた産業予備軍的なものがドーツと労働しながら失業しているといったような過剰就業とか偽装失業状態にある労働者が増えていって、それが産業の基軸的な部分を担わざるを得ないところに、フリーターの問題がすごく大きな「問題あり」状態になっている。」

「だからいまフリーターは自分たちのことをどのようにな称できるのかということが、すごく大きな論点になっていると思う。」

「自分がある種の階級「関係」規定を受けて賃金労働者という形を担っている。そこから少しズレることくらいはできるかもしれないけれども、大方としてはそれをやらざるを得ないというところに階級ができる。ぼくらは予め与えられた階級「関係」にはまっただままとしか言いようがない。要するに他称されっぱなしだ、と。それでそんな状況で自称するとはどういうことか、という問題になるわけね。」

「ぼくらは、「失業」ということをもう一ぺん考えてみる必要があるんじゃないかというのがあって、ぼくはフリーターが不安定多就業というか過剰就業にあるという意味で、失業だと

思っているわけ。失業状態に置かれたまま。だけど！ 就業しているという状態。それをぼくは過剰就業していると思う。フリーターには「君らは失業している」というと、そこから本当の意味での階級論みたいなもの、階級闘争論みたいなものをもう一ぺん再開することが必要だ。」

「これまでの階級闘争のイメージからはみ出てしまっているものを表現する「言葉」を自称という無関係の関係を造り上げるためにどの様に創出することができるかが、これからの課題かなと思っているわけ。」(※12)

〈V〉アンダークラスは〈横謀〉する

● 「後にネグリが(帝国)と呼ぶであろう「世界的に統合された資本主義CMI」による支配形態に即した剰余価値の搾出形態の「三極」に照応する労働の「三分割」——エリート層と被保障者層 *pôle garantii*;そして無保障者層 *pôle non-garanti* —— おける無保障者層(言うまでもなくそれは後にマルチチュードと呼ばれるだろう)が、「資本主義の権力設営の基本的支持基盤を形成し……支配層と一種の対位的関係」を結んでいるがゆえに、無保障者層が「特異化への生成変化を結集させる想像力と闘争の戦線を形成しうる者たちであり、労働の集団的力を営倉化し操作する巨大機械を分解する新たな目標、新たな実践を白昼へと置く闘争の前線を形成すべき者」であるとされた(Guattari et Negri 1985: 33,49-60)。こうした戦略はその戦術において顕著である。「ネグリの英語圏におけるスポークスマンであるハートは、Radical Philosophy 誌が01年10月27日にパークペック・カレッジで開催したコンファレンスで、階

級区分は「出来合いではなく……抵抗の集合行為を通じて形成される」のであって、「たんなる経験的差異の一覧表によって

ではなく権力への集合的な抵抗線」を以て形成されると発言している。」(※13)

● 『狼煙』をあげよう！

この列島における私・たちの歴史、それは、絶えず名付けられる(他称される)歴史であった。―遠くは「困民」・「貧民」・「窮民」・「細民」というように、近くは「日雇い」・「フリーター」・「ワーキングプアー」・「野宿者」・「ホームレス」・「生活困窮者」というように。

これまでの私・たちの歴史のなかで、私・たちは、遠くは「無産の民」・「下層労働者」と、近くは「フリーター」・「プレカリアート」と名付け返そう(自称しよう)としてもきた。

しかし、もはや列島社会が、それを宰領する国家・資本家階級が、私・たちの「労働力」を「搾取」する閥を超えて、まさに私・たちの〈身体〉を「植民地」化した「奴隷」として「収奪」し続けるこの時、私・たちは一切の他称をはねのけ、「アンダークラス」の自称のもとに立ち上がり、国家・資本家階級との階級戦へ向けて横に集い合う『狼煙』をあげる。

この社会の根底を担いながら、この社会の最底、「板子一枚」を踏み抜けば「奈落」へいたる最底の境位を生きる私・たち。この私・たちの〈解放〉はこの社会の全面的変革なくしてありえず、この社会の全面的変革なくして、私・たちの〈解放〉はありえない。

さあ、『狼煙』をあげよう。私・たちは「ここにいる(プレセンテ)」！

〈註〉

以上の『呼びかけ』における『私・たち』という仮構には、「この列島における」という限定句が賦されている。それは「この列島の住民である」と言いかえることもできる。

しかし、これまでの歴史におけるその『私・たち』に対する「他称」については、無条件に、無邪気に同様であると言うわけにいかない。その「他称」をめぐる、そのような限定句が賦されることじたいが、「抗争」・「係争」・「交渉」の問題であったし、いまもそうである。『私・たち』の「自称」についても、同様である。

今この時に『私・たち』が『アンダークラス』と「自称」しようとするとき、その「抗争」・「係争」・「交渉」について自覚的であらなければならぬ。言うならば、『私・たち』は、そのように「自称」しようとするとき、「この列島の住民」であるという限定句はまさに闘いとるべきものとしてあるというように『私・たち』であろうとしているのだ。(※14)

1. 長原豊 「嵌め殺しするとき 〈言葉〉と論理」(「現代詩手帖」01年7月「68年——詩と革命」)
2. 長原豊 「ヤサグレたちの街頭 瑕疵存在の政治経済学批判 序説」(15年航思社)
3. 前掲 1
4. 前掲 2
5. 前掲 2
6. 長原豊他 「階級とは何か 階級はどうなっていくのか?」(「文芸」河出書房01年春 特集「いま、ここにある階級闘争」)
7. 前掲 2
8. 長原豊 「〈セー法則〉を維持する時間—空間装置」(現代思想98年3月)
9. 長原豊 「論調2月」(「週刊読書人」00年2月4日)
10. 長原豊 「論調5月」(「週刊読書人」00年5月5日)
11. 長原豊 「論調2000年回顧」(「週刊読書人」00年12月22日)
12. 前掲 6
13. 長原豊 「木靴を履く——収奪・搾取」(「われら瑕疵ある者たち」(08年青土社)所収)
14. 生・労働・運動ネット 富山「ZINE・7」(16年夏)

刊行物案内

生・労働・運動ネット 富山

Z I N E ・ 2 2014 ・ 秋

〈フクシマへ〉折り返すことにむけて

Z I N E ・ 3 2015 ・ 春

さよなら 私の死者・たち——「困民丸」の小さな歩みから

Z I N E ・ 4 2015 ・ 夏

「敗戦／戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か

——「ラウンドテーブル・2014」での論議から

Z I N E ・ 7 2016 ・ 夏

私・たちの来歴

——「日本の構成的解体」の想像力の自立を求めて——

Z I N E ・ 8 2016 ・ 夏

「階級」という問題の来歴：資料リスト 00 年代から現在

Z I N E ・ 9 2016 ・ 夏

2016 年 我田引用「ヤサグレたちの街頭」考

生・労働・運動ネット富山 ZINE・9 - 2016・夏

〒 930-0009 富山市神通町 3 - 5 - 3
TEL : 076-441-7843 Fax : 076-444-6093
URL : <http://net-jammers.net/>
E-mail : jammers@net-jammers.net